



小児在宅ケア研究会会報 第5号

平成22年9月11日

【第6回小児在宅ケア研究会 年次集会のご報告】

平成22年7月10日（土）に、第6回小児在宅ケア研究会年次集会が、「入院時・急性期から始まる小児在宅ケアの支援」をテーマに、名古屋大学大幸キャンパスで開催されました。今年度は167名の方のご参加をいただき、小児在宅ケアに対する関心の高さを改めて感じることができました。また、特別支援学校の看護師の方なども参加もあり、多方面から小児の在宅ケアを考えるきっかけとなったのではないかと思います。

年次集会では、3件の活動報告と、2件の事例報告、そして、大阪府立母子保健総合医療センターの望月成隆先生による講演が行われ、それぞれで活発な意見交換がされました。

活動報告では、地域中核病院で行われている小児在宅ケアの取組み、小児専門病院の在宅医療支援室で行われている就学前児に対する支援、さらには訪問看護ステーションで行われている、小児の在宅ケアの実際に関する発表が行われました。例年感じることですが、それぞれの立場で小児の在宅ケアに様々な工夫と努力をしながら、一生懸命に関わられている様子がひしひしと伝わってきました。小児の在宅ケアを進めていくに当たっては、困難な事が非常に多いのですが、それにひるまず、目の前にあることから一つずつ取り組んでいく事の重要性を感じました。

事例報告では、外傷でストマを造設する事になったお子さんの事例と、家庭の事情で祖父母が主な養育者である、脳性まひの双子のお子さんの在宅ケアに関する事例の計2事例の発表が行われました。外傷は突然の出来事であるだけに、お子さんが事実を受け止める事からの支援が重要となりますが、お子さんが学童期であることから、セルフケアが重要となり、セルフケアを実施できるようになるためには、家族や学校からの支援が重要となることも、あらためて考えさせられました。また、2事例目では、様々な障害をもつお子さんの在宅ケアを考える上で、家庭での主たる養育者に関するアセスメントをしっかりと行い、必要な援助について養育者の方と家庭での生活をイメージしながら、具体的に一緒に考えることの重要性を感じました。

講演は、「新生児医療から見た小児在宅医療」というテーマで、大阪府立母子保健総合医療センター新生児科・在宅支援室の望月成隆先生にお話をいただきました。先生からは、日本の周産期医療の現状や問題点、大阪府立母子保健総合医療センターの実情、そして英国での在宅ケアの実際、現在取り組まれている大阪府長期入院児退院促進等支援事業、そして先生が目標とされている地域連携など、様々なお話を楽しくお聞きする事ができました。困難な問題を、自分ひとりで解決しようとせず、周囲にいる多くの人々を巻き込むことで、お子さんやその家族にとってよりよい方法を考える事ができるのではないかと考えさせられました。また、私たち看護職も外に向けて積極的に発信する能力を身につける必要があるのではないかと同時に考えさせられました。

年次集会に参加された方のうち129名(77.2%)の方が、アンケート調査にご協力いただきました。今年度も愛知県を中心として、様々な地域から参加いただきました。病棟看護師の方が半数以上となりますが、特別支援学校の看護師の方など、医療施設以外で活躍されている方の参加もあり、多くの方がこの年次集会に興味をもって参加して頂いたようでした。年次集



会全体の感想について、ほぼ全員の方が満足したと回答されており、その理由については、「看護を振り返るきっかけになった」、「家族の気持ちによりそうことの大切さを知る事ができた」、「今までの視点とは違う視点でとらえる事ができた」など、様々な回答が見られました。昨年と同様に、多くの方々のお役に立てたようで、年次集会を企画した運営委員一同でほっとしております。今後の研究会への要望については、様々な状況のお子さんや家族に対する具体的な支援の方法や、地域等の連携についてなど、様々な意見があげられていました。

今回皆様から頂きました貴重なご意見を、今後の小児在宅ケア研究会の活動等に生かしていきたいと考えております。アンケート調査の詳細は、資料として同封させていただきますので、ご覧下さい。

【第6回小児在宅ケア研究会総会のご報告】

第6回小児在宅ケア研究会総会が、年次集会と同日の7月10日に開催されました。報告事項として、事務局より現在の会員数の報告、その後平成21年度の活動報告が行われました。また審議事項としてあげられていた、平成21年度の決算と会計監査、また一部役員の変更、平成22年度の活動計画(案)ならびに平成22年度の予算(案)が審議され、全てについて承認が得られました。詳しくは、同封させていただきます総会資料をご覧ください。

(文責：堀妙子)